令和８年度第３回　教育委員会会議　会議録

１　日　時　令和８年６月18日（木）13：30～14：10

２　場　所　教育委員会会議室　ハーバーセンター４階

３　出席者　福本教育長

正司委員　今井委員　山下委員　本田委員（ＷＥＢ）　吉井委員

４　欠席者　なし

５　傍聴者　１名（一般１名・報道０名／報道０社）

６　会議内容

（福本教育長）

それでは、教育委員会会議を始めます。

本田委員がリモートでの参加ですので、確認します。本田委員、聞こえておりますでしょうか。

（本田委員）

はい。

（福本教育長）

本日は、協議事項４件、報告事項２件です。まず、非公開事項について、お諮りいたします。議題のうち、協議事項５、協議事項９、報告事項１、報告事項２については、教育委員会会議規則第10条第１項第６号により、会議を公開することにより、教育行政の公正かつ適正な運営に著しい支障が生じるおそれのある事項であって、非公開とすることが適当であると認められるものとして非公開としたいと思いますが、御賛同いただけますでしょうか。

（賛同）

（福本教育長）

それでは、議事に入ります。

協議事項７　特別支援教育の充実について

（福本教育長）

協議事項７、特別支援教育の充実について、事務局より説明をお願いします。

（甲斐特別支援教育課長）

特別支援教育の充実ということで、２ページの①特別支援の現状から⑤人材育成まで説明させていただきます。

３ページを御覧いただけますでしょうか。義務教育段階において特別支援教育を受ける児童生徒数ということで、直近10年間で全児童生徒数が１割減少していることに対して、特別支援教育を受ける生徒は倍に増えているということで、これは神戸だけの現象ということではなく、日本全体でそういった状況になっているのが現状です。

４ページでは、特別支援教育を受ける学びの場について、補足をさせていただいておりますので、また、御参照いただきたいと思います。

５ページは、市立特別支援学校の直近10年間の児童生徒数の推移です。全体で1.3倍ということで、その中でも知的障害の児童生徒が非常に増えている傾向でございます。

６ページは、知的障害の児童生徒の中でも、小学部と中学部の児童生徒が非常に増えているということ。また、その中で、知的に軽度のお子さんが非常に増えているというところから、特別支援学校の過密化につながっているという、現状になっています。

そういった現状を踏まえまして、神戸市の教育委員会としてめざす姿・方向性を７ページに掲げております。２点ございまして、１つは、インクルーシブ教育の推進ということで、障害のある児童生徒、障害のない児童生徒が共に学ぶことができるような学びの場の整備を進めていく。もう１つは、障害のある児童生徒の自立と社会参画を見据えて、児童生徒の個々の適性に応じた支援をしていくため、きめ細やかな支援に努めていくということ、この２点を進めていきたいと考えています。

８ページはその中での重点的な取組ということで、保護者の適切な就学先の選択に向けた支援や、地域校における特別支援教育の充実というのを進めていくということ。右の主な事業に令和７年度からの取組を記載しています。

９ページからは、個々の具体的な事業について補足をさせていただきます。まずは、（１）就学相談の充実についてです。子供たちの一人一人の教育的ニーズを踏まえた適切な支援をしていくため、就学相談は重要なことだと考えています。昨年度から執行体制を強化し、より多くの相談に対応できるような体制を取っているところです。今年度は、更に相談体制の組替等の工夫をしておりまして、年間650組に対応できるような体制を取っているということのほかにも、様々な会場で就学相談を実施していますが、今年度新たに灘区と須磨区の２つの会場を新設しまして、より利便性を高めて就学相談を実施しています。

３つ目はこれまではやってこなかったことですが、就学相談後、それぞれ児童生徒の状況を把握し、児童生徒が困り感なく勉強できているかどうかを確認する、状況の把握を行っています。

また、記載はしておりませんが、令和６年度から中学校の進学に向けた個別の相談という取組を行い、昨年度は105件の相談に対応させていただいております。

次のページは（２）学校支援チームです。これは昨年度から、学校からの依頼に基づいて、公認心理師などの職員が特別支援教育の専門的な知見に基づいて支援をさせていただいています。学校からオーダーがあれば、学級集団の様子を参観させていただいて、お子さんの理解や学級集団、学級運営の工夫について、先生方に助言しています。児童生徒や学校自体の困り感が大きくなってしまう前に、未然防止をするための効果を確認して、今年度も早速４月から、多くの小・中学校から連絡をいただいているという状況です。

続きまして、（３）自校通級指導教室の設置・拡充です。神戸市では、児童生徒が在籍校の慣れた環境で、安心して指導を受けることができるよう、令和２年度から自校通級指導教室を設置しておりまして、今年度、目標としておりました100校に設置しました。内訳としては、小学校が81校、中学校が17校、義務教育学校が２校となっています。今後も、自分の慣れた学校の中で通級の指導を受けることができるよう、令和18年度までの10年間で、必要な全ての小・中学校に設置できるよう進めていきたいと考えています。

また、自校通級指導教室100校全てに、今年度からICTの教育ソフトを導入させていただいています。導入によって、特別支援教育の指導経験が少ない担当の教員でも、多角的な実態把握や自立活動の目標を設定することができ、より効果的な自立活動の支援につながっていると考えています。４月から導入しており、活動の状況を確認しておりますけれども、通級指導の担当者だけではなく、特別支援学級でも活用されています。また、通級指導の先生が中心になってほかの先生に広めていけるよう、研修等を行っていく準備も進めていると聞いております。

13ページは小・中学校以外での通級による指導の取組です。まず、（４）高校では、今年度から少し方法を変えておりまして、３校を拠点校として位置づけ、通級指導の担当者の教員を配置し、より通級の指導が受けやすいよう対応しています。また、（５）幼稚園でも、これまでは拠点校通級指導教室という、小学校の中に拠点校通級指導教室を設置し、そこに保護者と幼児が行くという形で対応しておりましたが、今後は、幼稚園の中で通級による指導を受けられるよう、幼稚園通級指導教室を設置していくということで、今年度は、モデルとなる御影幼稚園と長尾幼稚園の中に通級指導教室を設置しました。

続きまして、（６）地域校への支援ということで、昨年度から特別支援教育課の指導主事が全ての小・中学校を訪問し、昨年度は、特別支援学級の実態把握と担当主事と特別支援学級担当者との関係づくりを大きな目的として訪問をさせていただきました。課題については、左に記載しています。今年度は、個別最適な学びの充実や、特別支援教育の理解推進という課題を解消するために、担当主事による学校訪問に加え、新たな取組として、学識経験者や指導主事が重点的に支援する、同じ校区内の小学校２校と中学校１校を選び、特別支援教育の推進校と位置づけました。２年かけて、より先進的な特別支援学級の充実に向けた取組を進めていきたいと考えています。

続きまして、（７）視覚・聴覚に障害のある児童生徒への支援です。これまで難聴学級については、神戸祇園小学校と湊翔楠中学校の小・中学校１校ずつしか設置をしておりま

せんでしたが、より学びやすい環境を整備するということで、今年度からニーズに基づいて小学校４校に難聴学級を設置しました。

また、昨年度からの取組として、専門的な視点を持つ教員が、視覚・聴覚に障害のある児童生徒が在籍する学校への教員向け巡回フォローを行い、機器の取扱いや教室関係の調整等についてのアドバイスをしているところです。また、盲学校小学部と湊小学校、それから、盲学校中学部と湊翔楠中学校は交流及び共同学習の取組をしておりまして、今年度も引き続き計画して取組をしていきます。

（８）医療的ケア支援、地域校への看護師の派遣です。地域校でも医療的ケアを受けている児童生徒がいます。看護師の派遣時間が令和６年度までは15時間ということで設定をしておりましたが、昨年度から、派遣時間を撤廃しておりまして、より手厚い支援が受けられるようになっています。本年度は15時間を超えるお子さんが、４名いらっしゃる状況です。

（９）いぶき明生支援学校分校設置です。いぶき明生支援学校では、開校当初から非常に児童生徒が増えており、受入れ体制の確保と、通学の負担軽減を図っていくということを目的として、令和10年度の分校開校を目指して、今年度、改修工事等に取り組んでおります。

19ページに参りまして、昨年度より様々な取組を進めてきたところですが、特別支援学校の児童生徒数に少し変化が見られているような状況です。令和４年度から令和７年度までは、毎年70名以上児童生徒数が増加していましたが、今年度は伸びが大幅に鈍化しておりまして、13人の増となっております。何が減っているかというと、括弧の中にございますように、これまで増えていた知的の小学部や中学部の児童生徒の伸びが大幅に鈍化したため、全体の伸びの鈍化につながっているような状況です。

⑤人材育成です。特別支援教育の取組を進めていくためには、やはり人材の育成が必要不可欠ということで、これまでも取組は進めてきましたが、今年度は、先ほど申し上げたICT教育ソフト、LITALICOを導入しておりまして、自校通級指導教室が設置されている100学校においては、150本搭載されている教員向けの10分動画等が、いつでも自分が見たいと思うときに見られるようになっており、そういったものを活用していくこと。また、これまでも研修は行っていますが、研修の中身や研修の数自体を充実させていくこと。また、大阪教育大学や兵庫教育大学といった大学院へ職員派遣を行っておりまして、今後も引き続きやっていきたいと考えています。

これらの取組によって、障害のある児童生徒がより学びやすいような環境整備に繋げていきたいと考えています。

（福本教育長）

本件について、御質問等ございますか。

（今井委員）
いろいろ手厚く、また、より丁寧な取組をしていただいているということで、ありがたいと思っております。
以前、中学校の特別支援学級に進まれる割合がほかの自治体と比較しても神戸は少ないというお話があったと思いますが、現状を教えてください。
また、９ページの（１）就学相談の充実に関して、会場の新設や相談後の状況把握といったアフターフォローもしっかりしていくということで、大変良いことだと思いますが、それを行っても、親御さん自身の背景や事情により、相談になかなか踏み出せない方へのアプローチについて教えてください。
もう一点、20ページに記載のとおり、教材等も充実させて御対応いただいているということで、もちろん特別支援に携わる先生の研修もすごく大事ですが、それ以外の先生含め、全教員が理解を深めていくということもすごく大事ではないかと思います。全教員に向けた研修の内容もここに含まれているのかどうか、教えてください。

（甲斐特別支援教育課長）
１点目から回答させていただきます。地域の特別支援学級から特別支援学校中学部の知的障害部門へ入学される児童生徒は、依然として数はいらっしゃいます。今年度で申し上げますと、75名の児童が小学校の特別支援学級から特別支援学校の中学部の知的障害部門に進学したという状況で、毎年約70人が進学しているというのは、過去からあまり変わっていないという状況です。その中でも、知的障害が軽度のお子さんが非常に多い傾向がありまして、取組を色々考えさせていただいているところです。
まず、１つは、先ほど少し申し上げた、中学校の進学に向けた個別の相談です。これは令和６年度から取り組んでおりまして、令和６年度91件、令和７年度105件の対応を行っている状況です。毎年８月頃から行っていますが、今年度は２か月前倒しを行い、今月６月から中学校の進学に向けた個別の相談を受けていただくことができるよう、進学に向けて早めの準備を考えておられるような親御さんに対しても相談対応ができるよう、体制を変えました。
続いて、２点目の就学相談を受けることがなかなか難しいという保護者への対応についてですが、まずは、知っていただくということが非常に大事ではないかと考えています。ウェブ等での広報に努め、保護者向けの案内を行なうことは、これまでも取り組んできたところです。また、神戸市総合教育センターも会場としていますが、それ以外で、例えば療育センターや各区の区民センター、新たに設けた区役所や文化センター、そういった市民の方ができるだけ来ていただけやすいような場所で会場を設けさせていただき、より就学相談が受けやすいような対策を取っていくということが必要だと考え、今年度も新たに会場を設けました。時間的な問題で、なかなか来るのが難しいという御家庭もあると思いますので、電話やメール等で御相談をいただくこともあります。今後も、どういった形が

より利便性が高く、相談しやすいか、様々な状況を聞かせていただきながら、引き続き考えさせていただきたいと思います。

（吉田事業推進担当課長）

就学相談の件について、神戸市のホームページでも特別支援学級はこういう教育課程で、こういうことを学びます、ということや、特別支援学校のそれぞれのカテゴリーについて動画で公開しておりますので、そちらを見ていただくことで保護者の方がある程度情報を得ていただけるようにしております。

３点目の研修についてです。委員がおっしゃるように、特別支援学級や通級担当やコーディネーターに関する研修は豊富に準備しています。一般のそれ以外の教員の研修については、まず、教員にとって時間がある夏休みの期間に夏季集中セミナーがございます。コロナ禍前までは参集型で集まっていただき、各分野専門の有識者の先生を講師に招いて、一般の先生にも特別支援教育の理解を図っていこうということで研修を行っていました。ただし、会場参集型にしますと人数制限もありますが、より多くの先生に学んでいただきたい、勉強していただきたいということから、コロナ禍以降は動画配信を行い、全ての先生方が動画で特別支援教育を学ぶ機会というのを夏休みに設けております。あわせまして、先ほどICT教育ソフトのお話もさせていただいたのですが、この中にも学び動画といいまして、約150本の特別支援教育に関する研修動画が収録されております。５分から10分の短い時間の動画が150本ということで、学校でも隙間時間を活用していただけるようになっています。今ちょうど、今年度自校通級を新規設置した学校の状況を把握するため、学校訪問しておりまして、私がいつも校長先生にお伝えしていますのは、例えば職員会議の最後の10分に、今日はみんなでこれについて考えてみましょうというように、ぜひICT教育ソフトの動画研修を活用していただいて、全ての先生方に考える時間を持っていただけたらありがたいと、お願いしております。

（正司委員）

ICT教育ソフト、LITALICOは昨年度からトライアルで導入されたということでしたが、今年度初めて本格導入となりましたので、現場の先生方のお声を幾つか紹介していただけますか。

（吉田事業推進担当課長）

昨年度、小・中学校合わせて10校でトライアル導入しました。今年度、自校通級指導教室を設置している100校で正式導入ということで、現在、活用していただいているところです。今後も自校通級指導教室設置拡充が進んでいくことから、導入校も増えていくという予定になっています。４月の本格導入から約３か月弱経過し、教材の閲覧実績を教育ソフトの会社にてカウントしていますが、４月と５月の２か月間で約9,200件、導入してい

る学校にて動画閲覧し、活用していただいていると聞いております。また、教材が約３万点ございますので、学年や困り感、カテゴリー別の検索が可能で、個別の児童生徒に応じた教材としてこれはどうでしょうか、とすぐに出てきますので、活用していただいているようです。声を聞きますと、通級指導の担当者はもちろん、特別支援学級は多様なお子さんがいますので、活用し、すごく助かっているという声をいただいています。導入している100校については、まだ始まって２か月、３か月の段階ですので、全職員に細かいところまで周知できていないことから、LITALICOをしっかり使っていけるような夏休みの校内研修を企画している学校が多いようです。現在、担当者が自分で使い込んで、夏休みにほかの職員へ伝えることができるよう、工夫をしている学校もあるようです。

また、子供たちの支援を考えるという部分に関しましては、今まではどうしても特別支援学級の担任や特別支援教育のコーディネーターからの一方方向の、こうしたらどうですかというアドバイスや助言が主でしたが、ICTツールを使ってお互い双方向で考え、対話しながら考えられるツールになったので、すごくありがたいというお声もいただいております。

（福本教育長）

御意見等ございますか。

では、次の案件に参ります。

協議事項８　英語教育の推進と国際交流について

（福本教育長）

協議事項８、英語教育の推進と国際交流について、事務局より説明をお願いします。

（松浦国際教育担当課長）

毎年この時期に文部科学省から、英語教育実施状況調査が発表されます。前年度の中高生の英語力が数値で示され、それに伴って改善計画の提出も求められています。今年に関しては、先週11日に発表され、本日午前９時半に公表されました。数値等については、後ほどお伝えさせていただきます。

神戸の英語教育の現状について、お伝えします。国際都市神戸で過ごす子供たちは、英語を通して、「実践的なコミュニケーション能力の育成」と「異文化理解の深化」の２点を重点項目として、推進に取り組んでいます。

小学校における、児童への意識調査の質問例は５ページに記載しておりますので、また、御覧になってください。意識調査の結果、外国の人と話をしてみたい、外国に興味があるといった割合は比較的高いですが、一方で、知っている英語やジェスチャーで自分の伝えたいことを伝えることができると答えた割合は低いという結果が出ました。中学生も同じ

ような結果に加えて、技能試験の分析から、話す力や書く力が低い特徴が見られました。小・中共通した点として、英語におけるコミュニケーションに未だ自信が持てないという点が分かりましたので、発信技能、話すことや書くことを強化した授業づくりに、昨年度より取り組んでいます。

資料の２ページ目に入ります。具体的には、英語で伝え合う楽しさを実感できる授業づくりと、学んだことを生かす機会として、体験プログラムや国際交流といった、この３つをバランス良く取り組むことによって、総合的な英語力を伸ばすよう努めています。それぞれについて、少し詳しくお伝えさせていただきます。

まず、（１）授業改善については、これまで得たデータを基に、英語授業スキルアップマニュアルをつくりました。これが、そのスキルアップマニュアルになります。資料には表紙だけ載せています。今年度は、各学校での好事例等を掲載し、コミュニケーション活動中心の授業やその授業のフォームを明確にして、小・中・高の先生に共有することで、スムーズな連携を図っています。

今年の大きな取組の１つとして、小・中学校で英語に関わる全ての先生方が参加するオンライン研修というのを行っています。オンライン研修ではスキルアップマニュアルを活用して、実際にコミュニケーションを行う中で、英語力を身につける授業をどのように進めていくか、また、どのように計画していくかを先生が共有できるようにしています。今年度は全６回×５学年の30回を予定していまして、各学年別に行っており、１回目が既に終わりました。約300名の先生方が１回目に参加していただいていますので、今後も続けていきたいと思います。

ここで少し授業の様子を見ていただきたいと思います。研究指定校の太山寺中学校の１年生の６月初めに行った授業の様子です。注目していただきたい点が、発表している生徒が聞いている生徒とやり取りをしているという場面です。

（ビデオは電波不良により視聴できず）

（松浦国際教育担当課長）

内容としては、発表している生徒が自分の好きなことを発表し、聞いている生徒に質問を投げかけます。投げかけられた生徒が、それに対して答え、更に質問し、やり取りをする。既に１年生の段階からそれができているというのを１つのモデルにして、こういう授業を目指しましょうということを、これから先生にも共有していけるよう、現在取り組んでいます。

授業で学んだ英語を生かす機会として、体験プログラムと国際交流にも並行して取り組んでいきます。

（２）体験プログラムとして、神戸には200人を超えるALTが活躍しており、ALTの先生が中心となって、様々なプログラムを実施しています。例えば、夏休みには神戸市外国語

大学をお借りして、１日英語だけで過ごすサマースクール等も行っており、毎年、大勢の中学生が参加しています。

（３）国際交流については、昨年の８月に教育委員会会議でもお伝えさせていただきましたが、今年度はオンラインの国際交流に力を入れていきたいと思っています。特に時差の影響が少ないアジア圏の国々で、英語を第二言語として学んでいる児童生徒、例えば台湾や韓国・インドネシアの生徒との交流を予定し、現在準備を進めています。お互いのモチベーションを上げる利点もありますし、アジアの国々の児童生徒が物おじせずに英語を話しているという姿がよく見られますので、その姿を見習って、神戸の生徒たちも自信につなげていってほしいと考えています。母語を英語としている生徒との交流となると、交流当初は語学力の差が顕著なので、子供たちが逆に自信を失ってしまうことも考えられますので、英語を第二言語として学んでいる児童生徒との交流に慣れてから、例えばフィリピンやオーストラリアの生徒とも交流を繋げていきたいと考えています。

④KOBEインターナショナルフェスタを今年２月にハーバーランドスペースシアターで行いました。これは異文化理解の深化を目指した取組で、ALTの先生方が自国の文化を紹介するイベントでして、保護者にも大変好評でした。中には万博に行ったようで楽しかったと言っていただいた方も多かったので、児童生徒だけではなく、やはり神戸の市民の方も国際理解に対して関心が高いのだということを感じた瞬間でもありました。

神戸らしさで言いますと、今年の夏休みに「KOBE Youth Summit:Toward 2035」ということで、2035年の神戸をテーマにして、高校生が英語でディスカッションをするイベントを予定しています。今、参加者の募集をかけており、これから参加人数がどんどん増えていくことを期待しています。

資料６ページに昨年度行われた学力検査の問題から抜粋した問題を２つ載せています。上の問題は複数の情報を読み取る問題、下の問題は自分の思いと理由を答える問題になっています。理由を答えるという点が、お伝えしました、求められているやり取りができる力を問う問題になっていて、こういった力の養成が今の課題になっていると思います。

最後に、資料にはありませんが、最初にお伝えしました、英語教育実施状況調査の結果についてお知らせします。今回発表された内容は、神戸の中学校３年生がCEFR A1レベル相当の生徒の割合、これは英検で言うと３級程度を取得している生徒の割合がどれだけだったかという数字です。今年度の発表では、神戸市は57.5％でした。昨年度は56.6％だったので、0.9％ほどの上昇でした。全国平均の54.6％は上回りましたが、政令指定都市平均の58.5％は下回りました。60％を大分超えられるよう、これから取り組んでいきたいと思います。

（福本教育長）

御意見等ございますか。

（山下委員）
具体的に、安心感と自信に焦点化されているのは、すごく良いことだと思いました。安心感や自信に焦点化し、保障していくためにどういう工夫をしているのか、実現するためにどういうことが大切になるのか、あるいは、大切にしているのか教えてください。具体的には発話に重点を置いているということでしたが、そこにどんな工夫等が加われば安心感や自信が保障されるのだろうか、と思い伺う次第です。

（松浦国際教育担当課長）
山下委員がおっしゃったとおりで、具体を示すことが大事だと考えています。誰が示すのかと言われたら、教員が示す。例えば、英語担当の指導主事がいますが、彼は英語がほとんどできません。今、オンラインの研修を担当している中で、僕は英語できませんとわざと研修を受講している先生に伝えています。ティーチャーズトークというALTの先生と会話して授業をスタートする場面がありまして、ALTアドバイザーと一緒に例を示しています。英語ができない彼がだんだん上手になってくる姿を見せることによって、子供たちが自信をつけることができるのではないかというのを１つの狙いにしていますので、安心感というのは、そういったところから生まれてくるのではないかと。一方、先生は、先生が英語を失敗したらいけないとか、上手な英語を伝えないといけないという思いがあります。確かにそうですが、そんなに上手くいくことばかりではないと、先生が苦悩している場面を見せてくれることで、子供たちのハードルは低くなるよということを、研修で伝えています。

（ビデオ視聴中）

（藤岡国際教育担当係長）
小学校を卒業して２か月ですが、原稿を見ずに自分の思いを話しています。

（松浦国際教育担当課長）
子供自身が何か原稿を見て話しているわけではなくて、自分の思いを伝えたい、拙い英語かもしれないですが、一生懸命伝える。聞かれた生徒も、すぐに反応する。この自然なやり取りを、これから神戸の子供たちができるようになればと考えており、この姿を共有することで各学校の先生方がイメージできるよう、今年は取り組んでいます。

（山下委員）
大変心強いと思います。

（福本教育長）

御質問等ございますか。

公開案件は以上となりますが、教育委員の皆様から教育委員会会議で取り上げるべき事項について、御意見ございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、本日の公開案件を終了いたします。

閉会14時10分